

* PMC ミステリー、深い井戸の底から引き上げられたなぞの物体

アーカイブ室新聞 112号で宝物引き上げよう金具製作の記事を書いた。アーカイブ室新聞 53号に除湿機の水を捨てるこの深い井戸について書いた。自動光電子午環(PMC)の望遠鏡フロアの階下には水抜き用の深い井戸(写真1)が東西に2本ある。



写真1 深い水抜き用井戸



写真2 深い井戸の底にあるなぞの物体

この西側の深い穴の底になにやら存在する事に気がついたのは、PMCの建物の管理を引き継いで、望遠鏡フロアの階下の空間の除湿機の水を捨てる役目を引き継いで間もなく(2008年4月)の事であった。気になっていたが直径30cmほどの塩化ビニールを垂直に埋め込んだ深さ5mほどの穴の底に横たわる物体を引き上げるのは容易な事ではない。そこでアーカイブ室新聞112号で書いたような「つるべ拾い用イカリ」の製作まで待たねばならなかった。

こんな面白いことは、こっそり一人でやりたかったが、この井戸の底の物体は多少不気味でもあった。この新聞記事に天文台歴史探検隊の者たちが黙っているわけもない。「つるべ拾い用イカリ」が出来て、1週間後の1月20日、ついに引き揚げ作業を行うことになった。天文台歴史観測隊の面々、高田、中根、山下、中桐は「イカリ」、懐中電灯を持ち、PMCに向かった。出かける道々、多分この金具では無理だろう、ゲームセンターにある景品を吊上げるクレーンの挟み込むような金具が必要だろう、今回は失敗しても仕方がないなどと話しながら現場に乗り込んだ。

現場の地下に入る前に、望遠鏡フロアに置いてある7~8mのロープを調達し、金具を縛り(写真3)、さあ準備完了。中根さんが懐中電灯で照らす井戸の底に向かって、「つるべ拾い用イカリ」を降ろしていく。案の定、直径30cmほどの所にある包みを「イカリ」で引っかけるのは容易ではなかった。何度も繰り返し試みているうちにうまく引っかかってく

れた。引き上げる途中で写真撮影のため手を止める事もあったが、落としてはならないので、途中の写真撮影は1回にして、一気に引き上げた。



写真3 ロープにつけたイカリ



写真4 引き上げられるなぞの物体

深い井戸の中から引き上げられたものは、俗にプチプチと呼ばれる気泡の入ったビニールの梱包用緩衝材で包まれ、ビニール紐で厳重に縛られたものであった（写真5）。



写真5 引き上げられたなぞの物体



写真6 包みを開いたところ

金具に引っ掛け引き上げる感覚ではさほど重いものではなかった。金塊か、という期待がないではなかったが、1982年完成のこの建物にそれほどのものがあるはずも無い。引き上げられた包みを見て、先ず思ったのは「観音さま」の像ではないかと思ったが、もっと悪い予感もしていた。それは、最悪は工事の際負傷した体の一部が包まれ「ミイラ」状に

なったものではないか、あるいは動物の屍骸ではないかという想像もあった。何しろこの地下室には狸が生息していた痕跡があったのである。恐る恐る包みを気味悪い気持ちを隠しながら嚴重なビニール紐を解いて出てきたものは、なんと真っ黒い彫刻であった(写真6)。深い井戸の底に横たわって25年以上経ているだろう。当初は水の中にあり、井戸が枯れてからは砂の上に横たわっていたため、細かい砂が着いていたが、裸の男女が抱き合っ接吻をしている彫刻であった。歴史観測隊の面々が驚嘆の声を上げたのは言うまでもない。

何とも謎めくではないか。引き上げたこの彫刻を書類箱に入れ、部屋に持ち帰り、筆で砂を落とす前に撮影したものが写真7である。筆を使って丁寧に砂を払ったものが写真8である。この何ともミステリアスな像の発見はどう考えたらいいのだろう。観測隊員一同は首をひねるばかりであった。



写真7 部屋に持ち帰った彫刻



写真8 砂を払った艶めかしい像

PMCの地下室から出たところで、観測フロアに展示しているマンの座標測定器に注油のために訪れていた畑中氏に出会った。彼はこの像を見て「ロダンの接吻」像だといった。観測隊の面々は、この像の出現に驚嘆するばかりで、そういったことに思いをめぐらせる余裕もなかったのである。

部屋でさっそく、「ロダンの接吻」像(写真9)について調べると、確かにそっくりではあるが、細部についてよく見ると男性の首の角度が、女性の足の位置、女性の首の角度などいくつかの点で違いはあるが、原型はたぶん「ロダンの接吻」であろう。

まずは、PMC、自動光電子午環建設の責任者であった東京天文台名誉教授最長老の安田春雄先生に何かこの件についてご存知ではないでしょうかと、お尋ねする手紙を書いた。さっそくお電話で返事をいただいた。天文台側のこのプロジェクト関係者がそのような像を

井戸の底に沈めるようなことをしたとは到底思えない。建設を請け負った業者側（三井造船）の関係者が「安全祈願」のためにそのような事をする習慣があったのではないかとのことであった。このプロジェクトの中では若手であった現役の鈴木君に尋ねても、全く心当たりはないということであった。鈴木君の話では光電自動子午環完成直後には、井戸の底にそのようなものはなかったという。



写真9 ロダンの接吻像

謎は解けない。PMC 望遠鏡フロアの階下に入れた関係者は建設工事以後では限られた人しかいない。いま少し、情報収集に努めてみよう。